

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成20年9月1日発行（毎月一回）2日発行
俳句雑誌 沖 第29巻第9号



俳句雑誌[おき]

9
月号

沖
発行所

命 名

能村 研三

この夏

この夏は、私にとっていろいろな事があった。

七月の初め、仕事の関係で岐阜に出張する早朝、出産のため実家に戻っていた紗恵が俄に産気づき産院へ向かった。私はそのまま出張に出かけ、その午後現地の会議中に元気な男の子が生まれたとのメールが届いた。

三日後出張から帰って、早速「孫」と対面となったのだが、何か気恥ずかしい思いがあった。私の子供は娘三人なので「男の子」は新鮮であるのと同時に期待に夢が膨らんだ。それと自分の血を分けた命を授かり、そこに存在する不思議さを感じた。子供の名前は、娘夫婦が是非私に付けてほしいと希望した。娘方の親としてやや差し出がましくも思った

白南風やリフトの駅の木枠窓

蓼科三句

夏の野に山岳警備のログハウス

三脚をさす夏草の香を宥め

夕風やダイバーズーツの姿干し

懺悔のごとプール歩行の列につく

風呂敷の西瓜包みの結び方

紗恵に男子誕生「陽登」と命名

朝凧や産気の潮を招き寄せ

炎陽の七月透かし男の子生る

抱けばすぐ男の子の反りをもて涼し

命名に登の字を賜ふ雲の峰

が、父登四郎の一字をもらって「陽登」（はると）と名付けた。

八月の初めから十日間、役所の仕事でドイツ・イタリアへ出張した出張から帰ってから、体調を崩したようなので診てもらったところ、問題はなかったが、今まで無理を重ねて働きすぎた黄信号を神様から授かったものだと考えることにした。これからは、もつと体に気をつけなければいけないことを身をもって実感させられた。

能村 研三



夏も逝く

林 翔

最初の「沖」九月号

「沖」の創刊号は昭和45年10月号であったから、一周年記念号は翌46年9月号ということになった。創刊号の投句者は八八名で、未広がりでもでたいと言いついたものであるが一周年記念号では同人一四名、会員二九六名、計三二〇名の大躍進であった。

表紙P2は「創刊一周年を迎えて」と題する登四郎主宰の短文。次のP1が目次で、P2 P3が作品と随想。作品の題が「死者の山水」なので、めだたい号なのになんで?と思つたら、「死者の霊つどふといふ恐山をたづねて」という話があった。十句中に

われに早世の二児あれば

しじみ蝶ふたつ先ゆく子の霊かの句があり、胸を衝かれた。二男の勁二君は生後数箇月で亡くなったのだが、長男の爽一君は可愛い盛りの六歳で世を去った。あの頃、能村家と林家は歩いて往き来する距離に在つたのだが、登四郎氏が涙を流しながらわが家を訪れ「爽一が死んだ」と告げられた時の事ははつきり印象に残っている。

P4 P5は翔の作品と随想。P6 P9は同人作品「潮鳴集」である。同人14名の内、現在も沖同人である人は、

かくも細き翳を持ちしか白朝顔

のうぜんがついと顔出す暁の闇

風呼びびつ風に呼ばれつ凌霄花

空蟬やささてはこの穴蟬の穴

シツクなる杖の老婆や夏ごろも

半袖や時計の金をきらめかせ

休暇尽くまなざし清き日焼子に

溜息のごとピアノ鳴り夏も逝く

同 齢 の 句 友 み な 亡 し 秋 ぞ 立 つ

教 へ 子 も 翁 め ぐ な り 敬 は む

九月十五日

河口仁志・鈴木良戈（当時は良花という筆名）の二名だけ。「沖」を去つて他結社に在る人二名。他の10名は、もうこの世に亡い。

P 10～P 12は森澄雄氏の寄稿。

P 13～P 19は牛尾三千夫氏の寄稿。森澄雄の名を知らぬ俳人は無かるうが、牛尾氏は国学院大学の先輩でもあり、われわれが短歌に親しんでいた頃の先輩歌人でもあった。登四郎氏が病氣休学した時、忘春のころ あはれに 病みて

をり。能村登四郎を思はざらめや

三千夫

と詠んだほど、登四郎氏の才能を愛していたのであった。

入選俳句・入選論文・入選隨筆の発表のあとには、「沖」の一年」と題する登四郎・翔の対談もあり、まことに充実した一周年記念号であった。



林 翔

蒼茫集



夏祭

坂本俊子

弟に草笛教へ不登校
夏祭帰れぬ訳のありにけり
この思ひ思ひ切れぬと水を打つ
君の家合歓咲く家の隣りかな
ゆりかごに赤子ねむりて稲の花
老の飼ふ金魚の肥満かなしめり

南ウイング

北川英子

この先は樹海の深みほたるぶくる
南ウイング日焼止めなど買ひ足して
地球まだ脈拍正常滴れり
黒を着て行かねばならぬ真炎天
六郷関東一旬満山万緑にからうじて道
千仞を夏霧隠し無明橋

樹齢重ね

遠藤真砂明

御母衣より白川郷へ四旬
横降りの雨に御母衣の青葉冷
葉桜や樹齢重ねのうねり幹
梅雨を支へて漆黒の太柱
歳月のいぶし艶かな大夏炉
飛魚が波にひらめく沖縄忌
子がくぐる風のまろみの青茅の輪

朴葉味噌

田所節子

山襷は霧の踊り場青葉雨
合掌句碑荒梅雨に彫深めをり
雨溜めてゐる藁屋根に夏の草
金色の日ざしをすすする心太
麦秋の焼けて泡立つ朴葉味噌
家々の涼しく灯る飛騨格子

逆 転 成宮紀代子

焼網の真つ赤に浜の暑氣払ひ
地鳴りして隣家毀たる梅雨最中
パドックの馬を見に立つ白日傘
入院の母の爪切る梅雨晴間
短夜やナースの歩み音のなく
逆転のヒット日傘の総立ちす

雪をんな 上谷昌憲

雨をんなみてクレソンの花盛り
天空に鉄接ぐ火花梅雨兆す
土砂降りとなる七夕の保育園
噴水に立ち直る苾ありにけり
まだ役に立つ齒の疼き浮いてこい
籐寝椅子日照雨の脚の見えにけり

鳩亭忌 池田 崇

出だし皆主峰狙ひの雲の峰
自づから素直になれり滝の前

金槌の筈の男が泳ぎ出す
忠言を畳み直して登四郎忌
鳩亭忌緋仕立ての色紙掛
一度だけ触れし慈顔や不死男の忌
パセリ 辻直美

師も父も夫も鬼籍や朴の散る
四葩咲く七日七日を数ふれば
戻り梅雨庫裏の暗きに泣くことも
六月の刻みパセリに揚げパセリ
夏の星死ほどの距離を保ちつつ
四半世紀とは籐寝椅子のほつれかな
現し世 秋葉雅治

月山は銀の延べ板さくらんぼ
鉄線花や杖ついて知る他人の杖
身を屈め四角四面の尊舟
現し世へ突き飛ばされて心太
蟻螻や聞かぬふりして聴く噂
会心の一打見上ぐる夏帽子

潮鳴集



結ぶ 古屋 元

トランクに結ぶスカーフ巴里祭
夏川や筆圧強き一行詩
明易のビルに裏口一つあり
盛り上る波の筋肉平泳ぎ
千枚の皿洗ひあげ帰省せず

桃を包む 甲州 千草

昼の月桃を包むに良ささうな
木の枝の上着たいくつ草を刈る
当日便出ずに自転車漕ぐ極暑
隠し味の効かぬ文体梅雨の雷
ほろほろと削るかつぶし朝曇

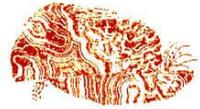
言ひ分け 菊地 光子

外出の言ひ分けをつめ冷蔵庫
白南風やコインロッカーより真砂
街薄暑少女は肘を尖らせて
短夜や解きて唾ふしつけ糸
枇杷熟るる白壁に影寄りそはせ

目から鱗 安藤しおん

不器用に生きて金婚雲の峰
サングラス目から鱗にちよつと邪魔
体内の水均しをり籠まくら
打水や爪先のめり男下駄
梅干して女三代濃くくらす

沖作品



能村研三選

蟬の殻ころつと魂転がりぬ

市川市

くらたけん

黒松に月皓々と露伴の忌

海の日や視界三百六十度

ジーパンの洗ひ晒しの夏を履く

河童忌や夏三日月のなほ瘦せて

指先も祭のいろに紅生姜

干昆布たたむ昆布を帯として

沖よりの海霧の深きに灯る街

糸とんぼ節継ぎ木賊伸びてをり

サングラス今日は泣顔かくしけり

青葉雨しかと根を張る先師句碑

荒梅雨や屋根は合掌深くして

水無月や湖底の村の立木透く

立葵白山へ雲迫り上がる

責道具並ぶ陣屋の梅雨暈

北海道

梶川智恵子

愛知

近藤 敏子

さくらんぼ円周率に点ひとつ

東京

七種 年男

昆布干す礼文高校前の浜

吊革の頂点にある梅雨湿り

壁よりも壁の色して守宮寝ぬ

紫陽花や小雨降る夜の真珠婚

突然の知らせに沙羅の花咲いて

梅雨の月人生少し動く日よ

緊張のハンカチの雛ふやしをり

号外を受け取つてゐる日傘かな

螢や男のメールみじかくて

白球を拾ひ一氣に草いきれ

戦前の町並み残り釣忍

睡蓮や老いて上野を山と知る

トマト丸齧りして昭和ふた昔

翡翠もカメラも人も動かざる

長崎

小林 奈穂

東京

齊藤 實

沖作品 15句選評

*

能村研三

河童忌や夏三日月のなほ瘦せて

くらたけん

河童忌とは言うまでもなく芥川龍之介の忌日（七月二十四日）、文人でありながら数多くの佳句を残した。

くらたけんさんの「夏三日月のなほ瘦せて」の措辞には、芥川のある端正なマスクと鋭い眼差しが極限まで細まった月と微妙に響き合う。「海の日」の句もスケールが大きいところがよい。

指先も祭のいろに紅生姜

梶川智恵子

紅生姜をあしらう料理には、庶民的なものが多いようだ。この紅生姜はどんな料理のためのものか。「祭のいろ」と言っているので、恐らく散らし寿司でもあろうか。指先を紅いろに染めながらいそいそと祭料理を作っている作者と、それを楽しみに待っている家族の姿までみえてくる。

荒梅雨や屋根は合掌深くして

近藤 敏子

六月に登四郎の合掌句碑建立十五周年を期して中部大会が開

かれた。その時に詠まれた句で、特選にした。改めて荒梅雨のなかの白川郷を訪ねた日が蘇る。

雨を存分に吸った分厚い葦屋根の合掌姿が更に深まったという写生から心象へ転換した把握がよい。

さくらんぼ円周率に点ひとつ

七種 年男

円周率のπ（パイ）とさくらんぼ、途方もなく離れているようである、あの小さくて赤いさくらんぼに妙に納得させられる。さくらんぼにも円周率があるのだ。「点ひとつ」と言われてみれば、限らない数字の羅列の中にある「点」はたった一つである。誰もが承知の事実を発見した手柄である。

緊張のハンカチの皺ふやしをり

小林 奈穂

「ハンカチ」を題材にした句では異色であろう。確かに緊張の余り思わず手を握り締める動作は誰もが経験したことがあるはずで、「ハンカチ」を力強く握り締めた後の皺に気づいた奈穂さんの緊張振りが窺えてほほ笑ましい。この作品は、六月二十一日の「啄木賞」受賞の折の体験を詠んだものであろう。翌日の千葉例会「特選」であった。

トマト丸齧りして昭和ふた昔

齊藤 實

昨今では、トマトを丸齧りする光景はほとんど見かけない。しかし、昭和生れの、しかも戦前に生れた作者には昭和への想いも一入であろう。平成も二十年ともなれば昭和はふた昔も過ぎ去ってしまった。作者は幼い頃からの、がぶりとトマトを齧る醍醐味を今も持ち続けている。作者にとって昭和は決して遠くない。（以下略）